

当院での体外受精により妊娠出産した症例の周産期予後の検討

医療法人社団 徐クリニック ARTセンター

中塚 愛 清須 知栄子 伊藤 真理 峰 千尋 徐 東舜

【目的】体外受精での妊娠の周産期予後にネガティブな報告もみられる。その詳細は不明な点も多い。今回我々は移植方法別にその予後に差がみられるのかを検討した。

【方法と対象】当院不妊外来で2011-2017年に妊娠し単胎出産した症例に対し、分娩院へ周産期の結果に関するアンケートを行い、そのアンケート結果を取りまとめた。新鮮胚移植、自然周期の融解胚移植、ホルモン補充周期の融解胚移植、それぞれで妊娠分娩に至った症例を対象とし、一般不妊治療(タイミング、排卵誘発、人工授精)での妊娠分娩症例を比較対象とした。今回の検討項目は、母体の年齢、在胎週数、早産率、帝王切開率、低体重出生児率(2500g以下)である。

【結果】分娩院からのアンケートの回収数は1659で、回収率は79.7%(1659/2082)であった。新鮮胚移植(73例) vs 自然周期の融解胚移植(355例) vs ホルモン補充周期の融解胚移植(564例) vs 一般不妊治療(667例)を各項目で比較すると

年齢では、 36.9 ± 4.0 vs 35.8 ± 3.5 vs 35.0 ± 4.0 vs 33.3 ± 3.9

在胎週数では、 $39W2D \pm 11D$ vs $39W0D \pm 13D$ 、vs $39W1D \pm 15D$ vs $39W3D \pm 9D$

早産率では、8.2% vs 5.9% vs 8.0% vs 4.3%

帝王切開率では、24.7% vs 27.6% vs 33.0% vs 18.0%

低体重出生児率では、9.6% vs 7.6% vs 11.3% vs 8.7%

となった。移植方法間での有意差はいずれも認めなかったが、早産率、帝王切開率、低体重児出生率のいずれにおいてもホルモン補充周期の融解胚移植の方が自然周期の融解胚移植よりも高めの傾向を認めた。一般不妊治療との比較では年齢はいずれの移植法よりも有意に若く、早産率はホルモン補充周期の融解胚移植、帝王切開率では自然周期、ホルモン補充周期いずれの融解胚移植でも有意に高かった。

【結語】融解胚移植、特にホルモン補充周期での妊娠では早産や帝王切開などの周産期リスクが高まる可能性があり、より慎重な周産期管理が必要と考える。